61. 胃平滑筋腫による胃重積の1例

山田　滋，中村　宏，有我隆光
有田誠司　　（鴨川市立）

患者は76歳男性。10年前に胃腫瘤を指摘されていたが放置。昭和62年4月29日夕食後突然の腹痛・嘔吐にて来院。胃 X-P，内視鏡にて胃腫瘤の幽門側へ重積の診断にて開腹術施行。大きさ3.5×4.0×4.0cm 胃内型球形の腫瘤が穹窿部大彎前壁に認められ，病理診断は平滑筋腫であった。十二指腸に陥入した胃隆起性病変本邦報告72例の臨床的特徴について上皮性・非上皮性腫瘍に分け検討した。

62. 直腸巨大 Villous Tumor の1治験例

大宮安紀彦，本木下覚郎，小熊資男
大野　完，坂田　早苗
（宇都宮記念病院）

症例は67歳女性。頻回の粘液水様性下痢，四肢しびれ感を主訴として来院し，大腸ファイバーにて Villous adenoma と診断した。粘液性下痢のため低K血症となりいわゆる electrolyte depletion syndrome を呈していた。癌化の可能性が高いと考え，腹会陰式直腸切断術を施行した。腫瘤は16×12×2cm で組織学的検索では癌化は認めなかった。Villous adenoma に電解質異常を伴う例は珍しく，我々が検索しえた限りでは，本邦14例目である。

63. 消化管内視鏡施行時における鎮静剤使用の有用性
—フルニトラゼパム及びジアゼパムについて—

永井米次郎，中尾照男（八街総合）

上部消化管には作用時間の短いジアゼパムを，ERCP，EST，硬化療法，大腸鏡には作用時間の長いフルニトラゼパムを各100例に静脈内に使用した。検査中の患者の苦痛はほとんどなかった。検査施行中もコンタクトが得られ，患者は協力的でレントゲン撮影時の息止めも可能であった。健忘効果が強いので再検査又は各種検査を施行する際の患者の協力が得やすかった。危険な合併症はなかった。内視鏡施行時のこれら薬剤の使用は大変有用であった。

64. 出血性乳房症例の検討

丸山　達興，大西盛光，関　幸雄
塚本総一郎，久保田享　　（川鉄）

52年10月より10年間の出血性乳房症例，11例について検討した。腫瘤のない例が8例，ある例が3例で，乳腺症4例，管内性乳頭腫3例，非浸潤癌2例，浸潤癌2例であった。乳管造影で診断可能であった例は6例であった。生検は，全麻下乳腺部分切除3例，乳管区分切除3例，局麻下生検5例であった。最終手術としては，生検のみ6例，乳腺全切除術1例，単純乳房切除術1例，非定型乳房切除術3例であった。

65. 腎疾患早期発見に関する学校養護学的研究（第2法）

山下泰徳（千葉大教育学部）

腎疾患を早期発見するために，村上方式による学校一斉検尿に加えて個別縦断的検尿を学校教育下で行う事が望しいとの考えからその適応を決定するべく数理疫学的調査研究を実施した。

即ち国立佐倉病院，同千葉東病院，社会保険千葉病院の腎移植，透析治療を含む一般腎疾患入院患者971例のカルテの既往歴と看護記録より，腎疾患と診断される前に遭遇した因子を調査し，この因子比率の国民一般の因子比率とを厚生統計協会発行の国民衛生の動向を参考として比較した。その結果，絶対的適応因子13個と比較的適応20因子をリストアップした。

この適応に従って千葉市立幸町第一中学校と同高浜第二小学校において試験的に簡易検尿を150人に対して施行したところ，従来の一斉検尿の陽性率の少くとも3倍の陽性率が見られた。

66. Hypothermic ischemic injury に対する ATP と Allopurinol 併用の有効性について

大竹喜雄，平沢博之，菅井桂雄
（千大・救急部，集中治）
Mark G. Clemens
（ジョンズ　ホプキンンス大）

肝保存の際 collins 液に ATP, xanthine oxidase inhibitor である allopurinol, SOD/CAT などの oxygen free radical scavenger を組み合わせて加え，薬剤による有効な肝保存法の確立を目的とした。26時間4°C で保存後，肝灌流を行ない glucose と胆汁産生を測定，灌流後肝の wet/dryweight, Na, K, energy charge を測定した。その結果 collins 群に比し，collins + ATP + Allopurinol 群のみが，すべての parameter において有意の改善をみとめた。